

若者の地元定着に関する考察

— 大学生の地元への愛着と誇り、ボランティア意向と就労意向の相関から —

A Consideration about the Settled Promotion of Youth: University Students' Attachment and Pride to Local, Correlation between Volunteer Intention and Employment Intention

松 元 一 明

Kazuaki Matsumoto

抄 録

本論では、高崎商科大学商学部 of 学生へのアンケート結果に基づき、大学生の地元に対する「愛着」や「誇り」と、地元での「ボランティア」や「就労」意向の間の相関分析をおこなった。さらに地域のどのような要素が、大学生の地元に対する「愛着」や「誇り」を生み出しているのかについてテキストマイニングの方法により抽出をした。

本論ではとくに、地元への「愛着」と「誇り」のいずれも相対的に低い、群馬県出身学生の回答に着目するとともに、地元への愛着と誇りを涵養し、定着を促すための知見を示した。

[キーワード：愛着、誇り、ボランティア意向、就労意向]

1. 序論

1-1. はじめに

2008年、わが国では1億2,808万人と総人口のピークを迎えたが、その後は減少局面に入り、本格的な人口減少社会を迎えている¹。

人口減少の局面においては、労働人口の減少や消費の低下による経済的な影響のほか、少子高齢化といった人口構造の変化による社会保障費の増大などで、財政的にも大きな影響が見込まれている。そのため、とくに地方の自治体は、これからの急激な人口減少に対して危機感を抱き、様々な施策に取り組み始めているところである。

このような状況の中、各自治体では、住民の満足度を高めて住民を定着させることや、住民の獲得を目的に、これまで以上に地域に対する住民の「愛着」、「誇り」といった指標を重視するようになってい

1-2. 本論の目的

かかる状況において本論では、若者の地元における「ボランティア」や「就労」が促進されることが、持続可能な地域づくりのための基礎になると考える。つまり「ボランティア」は、地域への理解を深めるきっかけとなるし、「就労」は地域に根差し、住み続けるための生活の基盤となるからだ。

先行研究においては、地元でのボランティアや就労には、地元に対する「愛着」と「誇り」が関係していることがわかっている。持続可能な地域づくりのためには、まず若者の地元への愛着と誇りを育てることが必須だろう。

このような問題意識のもと、本論では、本学学生へのアンケート調査をおこない、学生の地元に対する「愛着」や「誇り」の実態を明らかにした。また「愛着」や「誇り」が、地元での「ボランティア」の意向や「就労」意向にどの程度影響するのか分析をしている。そして地域のどのような要素が、地元に対する学生の「愛着」や「誇り」を生み出しているのかをテキストマイニングにより抽出した。

本論ではとくに、群馬県出身学生の地元への「愛着」と「誇り」を明らかにすることに力点を置いている。なお本論における調査対象は本学学生のみであるため、データに偏りがあり、結論は仮説的なものである。しかし本論が、群馬県の若者の地域への愛着と誇りを涵養するための知見を示すものとなれば、群馬に拠点を置く大学の研究者として幸甚である。

2. 愛着と誇り

2-1. 愛着とは

まずは「愛着」の概念について整理したい。地元地域への愛着は「郷土愛」とも呼ばれ、人びとの中に生じる自然な感情として理解されている。

東京都足立区でまちづくりをおこなう市民団体である、「愛着あだちの会」の斎藤善久代表によれば、地域への愛着とは「長い間暮らしているうち、自分の中に内発的に生まれてきた、自分が住んでいるこの地域を大切にしたいと思う気持ち」である（愛着あだちの会2018）。愛着とは、内発的で自己完結する、地域への肯定的な意識ということになる。

この地域への「愛着」と「地域に住み続けたいという意向」の間には、国際的にも相関があることがわかっている。ドイツ、アメリカ、スウェーデン、韓国、日本の5か国の18～24歳の若者を対象とした「第7回世界青年意識調査²」では、「地域好感度（愛着）」と「定住志向」の間に5か国全体で「0.528」の相関が示された。日本は5か国の中では相対的に最も低い相関となったが、それでも「0.438」の相関がみられる。

さらに地域への愛着は、定住志向のほか地域活動との関係があることが先行研究により示されている。静岡県と愛知県で実施された調査では、地域への愛着が高い住民ほど、町内会活動やまちづくり活動といった「地域活動」に熱心であるというデータが導かれている（鈴木・藤井2008）。

このように、地元地域に対する「愛着」は、①「地元定着」や、②「地域活動」を促す重要な要素となることがわかった。

2-2. 誇りとは

一方、地域への「誇り」とはどのような感情を示すのだろうか。

近年、地域に対する市民の「誇り」をあらわす指標

として「シビックプライド (civic pride)」という概念が注目され、定住人口の増加を目指す自治体の政策などで用いられている。

東京理科大学理工学部教授で「シビックプライド研究会」の伊藤香織代表は、シビックプライドについて、「単なる町自慢や地元への親近感ではない。郷土愛という言葉にも似ているが、ニュアンスを異にするのは、シビックプライドは当事者意識にもとづく自負心である」と説明する（伊藤2018：2）。

また「シビックプライドを持つ住民は、まちづくり・地域づくりの大きな資源になる」（彩の国さいたまづくり広域連合2018：1）と理解され、住民の地域への「自負心」や「誇り」が地域資源として重視されるようになった。

社会心理学の見地から「誇り」とは、「優れた目標の達成など他者から賞賛を受けるような自分または他者の成功の結果生じる自己効力感の高まりと穏やかな興奮を伴う肯定的情動」と定義される（有光2007、傍点は筆者）。

つまり地元への誇りは、他者の称賛を通じて促進される、地元への肯定意識ということになる。他者の目を通じて自負心を生み、地域づくり、まちづくりの原動力へとつなげるというメカニズムが描ける。

2-3. 群馬県民の地元に対する愛着と誇り

住民の定着や地域活動を促進するためには、地元への住民の「愛着」ならびに「誇り」が重要な要素となることが分かった。そこで群馬県民の地元への「愛着」や「誇り」の実態について、2016年に「ブランド総合研究所」が実施した「都道府県出身者による郷土愛ランキング」から見ていきたい。

この「郷土愛ランキング」は、出身都道府県についての「愛着度と自慢度³」に基づき、そのポイントから都道府県をランキング化した調査である（ブランド総合研究所2016）。この調査では、出身地への「愛着度」、「自慢度」について、対象者に5段階で評価させ、回答値をポイント化して順位付けをしている⁴。

調査結果を見ると、群馬県出身者の「愛着度」は27.7ポイントで全国35位、「自慢度」は10.9ポイントと全国44位であり、いずれも低位となっている。調査対象者の出身地と居住地は必ずしも一致していないものの、調査結果をみる限り、群馬県出身者は地元への愛着が相対的に弱く、誇り（自慢度）も極めて低いと

ということが分かった。

ちなみに、愛着度の高い都道府県は、上位から「北海道」54.4ポイント、「沖縄県」54.2ポイント、「京都府」51.4ポイントと続く。また自慢度は、「京都府」45.8ポイント、「北海道」41.7ポイント、「沖縄県」35.6ポイントとなっている。愛着度、自慢度ともに同じ3つの地域で占めており、いずれも観光地として有名な地域であることが共通する。

3. 群馬県におけるボランティア活動と大学新卒者の地元就労状況

繰り返しになるが、地元への住民の「愛着」ならびに「誇り」は、住民の地域活動や定着を促進することがわかっている。それでは、群馬県民の地域活動や、地元での就労の実態はどのようになっているか各種データから確認をしたい。

3-1. 群馬県におけるボランティア活動の状況

地元への「愛着」、「誇り」とともに低い水準にあることが示された群馬県民であるが、ボランティアへの参加率は、全国でどのような位置にあるのか見てみたい。

総務省統計局により2016年に実施された「平成28年社会生活基本調査」では、「過去1年間にボランティア活動をした(10歳以上の)人の割合」を都道府県別に集計している。その結果を見ると群馬県は28.3%であり、全国で20位に位置づけられた。全国平均は26.0%であり、群馬県は平均をやや上回る水準にある。

以下の図1は、「群馬県民の年代別ボランティア活動参加率」を表したグラフである。数字は、世代ごとの人口の総数に対し「過去1年間にボランティア活動

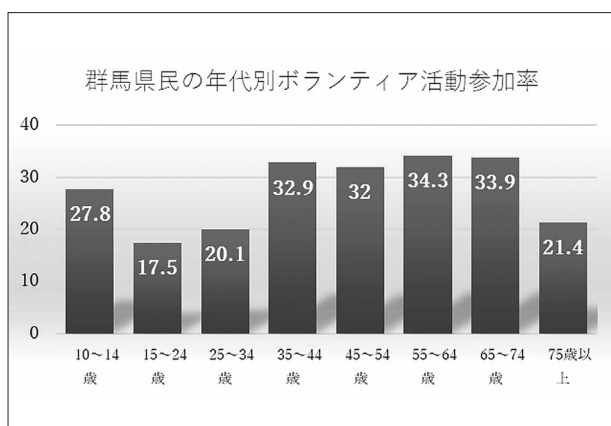


図1 群馬県民の年代別ボランティア活動参加率

をした人の割合」を示したものである。

これをみると、大学生が該当する15歳から24歳の若者世代のボランティア活動参加率(17.5%)が、全世代を通じて最も低くなっている。また同世代の参加率を男女別にみると、女子が22.4%である一方で、男子は12.9%と極端に低い水準にあった。

3-2. 群馬県における大学新卒者の就職状況

大学生をはじめとする新卒者の地元への就職は、若者の地元への定住の大きな要因となる。ここでは群馬県における新卒者の、地元への就労についてのデータを確認したい。

群馬県内で「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)⁵」に参加する本学ならびに「共愛学園前橋国際大学」、「上武大学」、「明治学院大学⁶」の5大学の集計によれば、2014年の新卒者の地元就職率は49.5%であった。5大学では、2019年に地元就職率を60%に増やすことを目標としている。

また文部科学省の「高等教育に関する基礎データ」によれば、2014年の群馬県内私立大学新卒者の県内就職率は42.2%である。北関東の他県をみると、栃木県、茨城県ともに42.2%であった。一方、東京都にある私大新卒者の都内就職率は66.4%となっている⁷。

3-3. 高崎商科大学卒業生の県内就職率

ここでは、本学学生の県内就職率について見ていきたい。

以下の表1は、平成29年度の大学商学部卒業生の就職についてのデータである。本学は年度により異なるが、学生のおおよそ70%が群馬県出身者である。

以下、県内出身者の県内就職率を見ていきたい。

	大学商学部		
	男子	女子	計
卒業生数	102人	47人	149人
うち県内出身者数	69人	33人	102人
うち就職者数	66人	30人	96人
うち県内就職者数	46人	23人	69人
うち県外出身者数	33人	14人	47人
うち就職者数	29人	12人	41人
うち県内就職者数	12人	4人	16人

表1 平成29年度本学商学部卒業生の就職状況

2016年度卒業の群馬県出身者で就職した者は96名であり、うち69名が県内で就職している。県内出身者の県内就職率をみると71.8%（男子69.6%、女子76.6%）である。27名（28.1%）が県外へ就職する一方で、群馬県外出身者で県内に就職した者（Iターン者）は16名いた（県外出身者の39%）。群馬県全体の大学生の県内就職率に比べると、本学学生は地元への就職率が高い傾向にある。

4. 本学学生へのアンケート調査

地元に対する「愛着」や「誇り」が、地元での「ボランティア意向」や「就労意向」と関連があることは先行研究により示されているが、ここではアンケート調査を通じて本学学生の地元への愛着と誇りの度数を見るとともに、本学学生の地域活動の参加や地元での就職の意向について明らかにし、両者の相関についても確認したい。また合わせて学生の地元への「愛着」と「誇り」が、どのような要因で成立しているのかを示したい。

4-1. 調査について

本調査の概要と調査対象のフェイス、調査の項目は以下の通りである。

（調査概要）

調査目的：本学学生を対象に、地域に対する「愛着」や「誇り」とそれらを感じる理由、また地域での「ボランティア」の意向や「就労」意向を問い、それぞれの要素の相関と大学生の地域に対する「愛着」や「誇り」を生み出す構成要素を明らかにする。

調査方法：アンケート調査（自記式）

調査時期：2018年9月13日（木）、14日（金）

調査対象：高崎商科大学商学部 平成30年度「地域創造（大学1年生を主とした必修科目）」履修者197名（うち経営学科117名、会計学科80名）

（調査対象者のフェイス）

性別：男子130名（66%）、女子67名（34%）

学年：1年生194名（うち留学生10名）、3年生3名（うち留学生1名）

出身国：日本人186名（男子122名、女子64名）、留学生11名（男子8名、女子3名）

（調査項目）

調査では下記の5つの項目について、学生の自記式にて回答させ回収をした。

- ① 出身地（自らが地元と認識しているところ）
- ② 地元に対する「愛着度」（5段階のリッカート尺度で、とても強いは「5」、どちらでもないは「3」、とても弱いは「1」）とその理由
- ③ 地元に対する「誇り」（5段階のリッカート尺度で、とても強いは「5」、どちらでもないは「3」、とても弱いは「1」）とその理由
- ④ 地元での「ボランティア」意向（はい、いいえ、わからない）
- ⑤ 地元での「就労」意向（はい、いいえ、わからない）

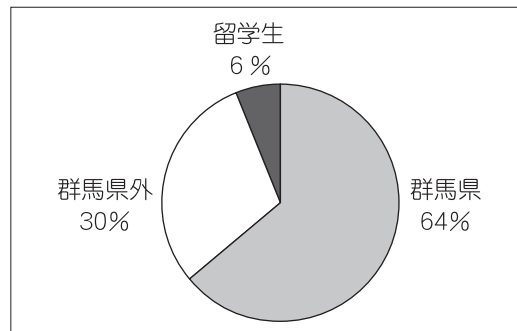
4-2. 調査結果

以下、5つの質問項目に沿って調査結果を示す。

4-2-1. 学生の出身地

学生の出身地については次の通りである。全回答者197名のうち群馬県出身者が127名（うち高崎市53名、前橋市22名など）、群馬県外出身者が59名（埼玉13名、長野・栃木7名、新潟・北海道6名、青森・鹿児島4名、山口3名、山形2名、岩手・神奈川・静岡・岐阜・滋賀・岡山が各1名）、留学生が11名（中国6名、ベトナム5名）となっている。

図2 学生の出身地の割合



4-2-2. 愛着と誇りの平均度数

本調査では、地元への「愛着」ならびに「誇り」の度数について、その強弱を5段階（リッカート尺度）で評価させ、回答を求めた。「愛着」ならびに「誇り」の度数が極めて高い場合は「5」、どちらでもない場

合は「3」、極めて低い場合は「1」といった具合である。

学生の地元への「愛着」、「誇り」の平均度数については、以下の表2において「全学生」、「日本人のみ」、「群馬県出身者」、「高崎市出身者」の全体平均と男女別平均、「留学生」の平均の категорияに分けて表記している。

		全学生 (N=197)	日本人 (N=186)	群馬県 (N=127)	高崎市 (N=53)	留学生/参 (N=11)
愛着	男	3.821 (N=129)	3.786 (N=122)	3.840 (N=88)	3.815 (N=38)	
	女	4.092 (N=65)	4.078 (N=64)	3.846 (N=39)	3.933 (N=15)	
	全体	3.912 (N=194)	3.887	3.842	3.849	4.5
誇り	男	3.456 (N=127)	3.426 (N=122)	3.409 (N=88)	3.710 (N=38)	
	女	3.815 (N=65)	3.843 (N=64)	3.435 (N=39)	3.466 (N=15)	
	全体	3.578 (N=192)	3.569	3.417	3.641	3.83

表2 地元への「愛着」ならびに「誇り」の平均度数

(愛着)

まずは地元に対する「愛着」の度数について、各カテゴリー別の平均を見てみたい。

なお回答者には、地元への「愛着」とは主観的な感情であり、自己完結するものと理解するように伝えている。

全学生の地元への「愛着」の平均度数は(3.912)という結果であった。日本人のみのデータでは(3.887)と減少した。有効回答のあった留学生の回答をみると、「愛着」の平均度数は(4.5)となっている。サンプルが少ないため参考程度ではあるが、日本人に比べ、留学生の地元に対する愛着度は高い傾向が示された。

次に地元への「愛着」について、男女間で差があるのかを見てみたい。表2の通り、すべてのカテゴリーにおいて、女子の方が「愛着」の度数が高いという結果が出ている。ただし、群馬県出身者に限れば、男女の平均値はほぼ同数であり、他のカテゴリーの男女差から見ると特異な結果である。群馬県出身の男子の「愛着度」(3.840)は、全国の男子平均(3.786)よりも高い一方、群馬県出身の女子の「愛着度」(3.846)は、全国的女子平均(4.078)よりも低い数値となっている。

(誇り)

続いて地元に対する「誇り」の度数について、各カテゴリー別の平均を見てみよう。回答者には、地元への「誇り」とは、他者の存在を前提とした感情であり、地元を誇らしく思うことで自己の感情を満たすものと理解するように説明している。

なお、全学生の「誇り」の平均の度数は(3.578)であり、誇りが愛着のポイントを(0.33)下回った。有効回答のあった留学生の「誇り」の平均値をみると(3.83)であり、日本人の平均値(3.569)と比べると、愛着と同様、誇りについても数値が高い。

次に地元への「誇り」についても男女差があるのかを見てみたい。表2の通り、地元に対する「誇り」についても、女子が高い傾向にある。サンプル数が少ないため参考程度であるが、高崎市出身者については唯一、男子(3.710)が女子(3.466)よりも上回った。

(単純集計からの結果)

「愛着」と「誇り」の度数の平均値を見ると、全てのカテゴリーにおいて、「愛着」の度数が「誇り」を上回る結果となった。また一部に例外があるものの、「愛着」ならびに「誇り」の度数いずれも、女子が高い傾向にあることが分かった。

以下は、「愛着」ならびに「誇り」の平均値をカテゴリー毎に順位にしたものである。

「愛着」: 留学生(4.5) > 日本人(3.887) > 高崎市出身者(3.849) > 群馬県出身者(3.842)
「誇り」: 留学生(3.83) > 高崎市出身者(3.641) > 日本人(3.569) > 群馬県出身者(3.417)

一部サンプル数が少ないため、断定はできないものの、「愛着」も「誇り」も群馬県出身者が相対的に低く、先述した「愛着度ランキング」の結果と同傾向を示すことが分かった。

以下、さらに男女を別にし、細分化した順位である。

「愛着」: 留学生(4.5) > 日本人女子(4.078) > 高崎市女子(3.933) > 群馬県女子(3.846) > 群馬県男子(3.840) > 高崎市男子(3.815) > 日本人男子(3.786)
「誇り」: 日本人女子(3.843) > 留学生(3.83) > 高崎市男子(3.710) > 高崎市女子(3.466) > 群馬県女子(3.435) > 日本人男子(3.426) > 群馬県男子(3.409)

女子が「愛着」、「誇り」とともに高い傾向にあることがわかる。男女別にみると、群馬県出身の女子は「愛着」、「誇り」とともに相対的に低く、群馬県出身男子はとくに「誇り」の度数の低さが目立つ。

4-2-3. ボランティア意向

ここでは、地元でのボランティア意向について、「日本人全体」、「群馬県出身者」、「群馬県以外の出身者」の categories に分けて単純集計した結果を示す。なお、留学生には、ボランティア意向についての回答を求めている。

「日本人全体 (N=186)」において、「地元でボランティアをしたい」と回答した者は98名 (52.6%)、「どちらでもない・わからない」と回答した者は33名 (17.7%) であった。両者を合わせると、132名で、全体の70.9%となった。

次に「群馬県出身者 (N=127)」において、「地元でボランティアをしたい」と回答した者は66名 (51.9%)、「どちらでもない・わからない」と回答したものは24名 (18.8%) であった。両者を合わせると90名で、全体の (70.8%) となる (図3)。さらに「群馬県外出身者 (N=59)」については、「地元でボランティアをしたい」と回答した者は32名 (54.2%)、「わからない」が10名 (16.9%) で、両者を合わせると42名で全体の71.1%であった。

地元におけるボランティア意向については、群馬出身者の「地元でボランティアをしたい」と答えた割合 (51.9%) が、県外出身者の割合 (54.2%) に比べやや低いものの、有意な差はみられなかった。

4-2-4. 就労意向

ここでは、地元での就労意向について、「日本人全体」、「群馬県出身者」、「群馬県以外の出身者」の categories に分けて単純集計した結果を示す。なお、留学生には、就労意向についての回答を求めている。

「日本人全体 (N=186)」において、「地元で働きたい」と回答した者は81名 (43.5%)、「どちらでもない・わからない」と回答した者は49名 (26.3%) であった。両者を合わせると130名で、全体の69.8%となった。

続いて「群馬県出身者 (N=127)」の中で、「地元で働きたい」と回答した者は54名 (42.5%)、「どちらでもない・わからない」と回答した者は33名 (25.9%) であった。両者を合わせると、87名で、全体の68.5%である (図4)。

また「群馬県外出身者 (N=59)」では、「地元で働きたい」と回答した者は27名 (45.7%)、「どちらでもない・わからない」と回答した者は16名 (27.1%) であった。両者を合わせると、43名で、全体の72.8%となった。

地元における就労意向については、対象の学生が大学1年生であり、まだ就職が自分事になっていないためか、ボランティア意向と比べて全般的に低い数値となった。

群馬県出身者での「地元で働きたい」割合 (42.5%) は、群馬県出身者以外 (45.7%) の者と比べると、やや低い結果となった⁸。

地元における「ボランティア」ならびに「就労」意向ともに、群馬県出身者は県外出身者よりもやや低い数値となっている。

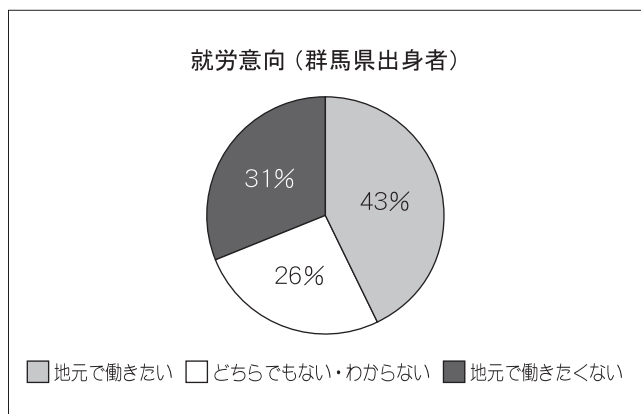
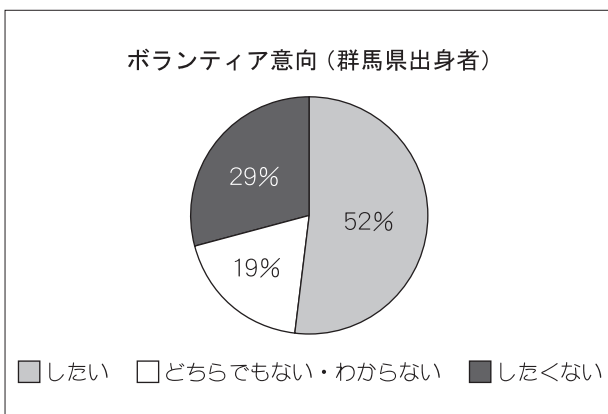


図3 「地元でのボランティア意向 (群馬県出身者)」 (左図)

図4 「地元での就労意向 (群馬県出身者)」 (右図)

4-2-5. 「愛着」「誇り」と、「ボランティア意向」「就労意向」の相関

ここではすべての回答から、大学生の地元への「愛着」ならびに「誇り」の度数と、ボランティア意向、就労意向の間の相関を見ていきたい。

以下の表3は、留学生を除く日本人学生全体の「愛着」ならびに「誇り」の度数と、ボランティア意向、就労意向の間の相関をみたものである。表中の数字は相関係数(r)である。

表3の通り、愛着と誇りの間には、比較的強い「正の相関(0.58)」が見られた。また「ボランティア意向」と「就労意向」の間にも「正の相関(0.393)」が見られる。さらに「愛着」と「就労意向」の間(0.329)、ならびに「誇り」と「就労」の間(0.369)には弱い相関が見られた。

なお、「ボランティア」ならびに「就労」意向の回答は、「はい」を「1」、「いいえ」を「2」、「わからない・どちらともいえない」を「3」としたため、両者の相関にマイナスの数値が示されている。

(N = 186)

	愛着	誇り	ボランティア	就労
愛着	1			
誇り	0.580	1		
ボランティア	-0.122	-0.268	1	
就労	-0.329	-0.369	0.393	1

表3 「愛着」「誇り」「ボランティア」「就労意向」の相関

上記の表3にある相関分析は、「ボランティア意向」と「就労意向」の回答に「わからない・どちらともいえない」を加えているため、相関が弱く現れている。「わからない・どちらともいえない」の回答を除き再度集計をしたところ、表4の通り、より明確な相関が導き出された。

(N = 121)

	愛着	誇り	ボランティア	就労
愛着	1			
誇り	0.640	1		
ボランティア	-0.343	-0.417	1	
就労	-0.367	-0.343	0.489	1

表4 「愛着」「誇り」「ボランティア」「就労意向」の相関
(「わからない・どちらともいえない」の回答を除く)

以下、「日本人全体」の学生の地元への「愛着」ならびに「誇り」の度数と、「ボランティア意向」、「就労意向」の有無の間の相関について分析した結果である。

- ・「愛着」と「誇り」には比較的強い相関関係(0.640)がある
- ・「ボランティア意向」と「就労意向」の間には相関関係(0.489)がある
- ・「愛着」と「ボランティア意向」(0.343)、「就労意向」にはいずれも相関があるが、「就労意向」(0.367)により強い相関がある
- ・「誇り」と「ボランティア意向」、「就労意向」(0.343)の間にはいずれも相関があるが、「誇り」と「ボランティア意向」(0.417)の間に、より強い相関がある

(群馬県出身者)

次に群馬県出身者に絞り、各項目の相関関係を見てみたい。こちらも「ボランティア意向」と「就労意向」について、「わからない・どちらともいえない」の回答を除き集計したところ、以下の表5にあるように、より明確な相関が現れた。

(N = 82)

群馬	愛着	誇り	ボランティア	就労
愛着	1			
誇り	0.540	1		
ボランティア	-0.311	-0.390	1	
就労	-0.437	-0.401	0.464	1

表5 群馬県出身者の「愛着」「誇り」「ボランティア」「就労意向」の相関

(「わからない・どちらともいえない」の回答を除く)

以下、「群馬県出身」の学生の、地元への「愛着」ならびに「誇り」の度数と、「ボランティア意向」、「就労意向」の有無の間の相関について分析した結果である。

- ・「愛着」と「誇り」には相関関係(0.54)がある
- ・「ボランティア意向」と「就労意向」には相関関係(0.464)がある
- ・「愛着」と「ボランティア意向」には弱い相関(0.311)がある

- ・「愛着」と「就労意向」には相関 (0.437) がある
- ・「誇り」と「ボランティア意向」には相関 (0.390) がある
- ・「誇り」と「就労意向」には相関 (0.401) がある

(群馬県出身者男女別)

さらに群馬県出身者を男女別に分けて、各項目の相関関係を見てみた。いずれも「わからない・どちらともいえない」の回答を除いたものである。

(N = 53)

	愛着	誇り	ボランティア	就労
愛着	1			
誇り	0.594	1		
ボランティア	-0.337	-0.440	1	
就労	-0.425	-0.426	0.554	1

表6 群馬県出身「男子」学生の「愛着」「誇り」「ボランティア」「就労意向」の相関

(「わからない・どちらともいえない」の回答を除く)

以下、「群馬県出身の男子学生」の地元への「愛着」ならびに「誇り」の度数と、「ボランティア意向」、「就労意向」の有無の間の相関について分析した結果である(表6)。

- ・「愛着」と「誇り」の間には相関関係 (0.594) がある
- ・「愛着」と「就労意向」、「誇り」と「ボランティア意向」により強い相関が働いている

(N = 29)

	愛着	誇り	ボランティア	就労
愛着	1			
誇り	0.345	1		
ボランティア	-0.256	-0.273	1	
就労	-0.495	-0.371	0.349	1

表7 群馬県出身「女子」学生の「愛着」「誇り」「ボランティア」「就労意向」の相関

(「わからない・どちらともいえない」の回答を除く)

以下、「群馬県出身の女子学生」の地元への「愛着」ならびに「誇り」の度数と、「ボランティア意向」、「就労意向」の間の相関について分析した結果である(表7)。

- ・「愛着」と「誇り」の間には相関 (0.345) があるも

の、群馬県出身男子 (0.594) に比べると弱い

- ・地元への「愛着」と「誇り」は、「ボランティア意向」よりも「就労意向」により強い相関が働く
- ・とくに「愛着」と「就労意向」の相関 (0.495) が強い

4-2-6. 相関係数から見る結論

以下、大学生の地元への「愛着」ならびに「誇り」の度数と、「ボランティア意向」、「就労意向」の有無の間の相関を見た結果、考えられることについてまとめたい。

まず、日本人学生全体の傾向から、「愛着」と「誇り」には比較的強い相関があることが導かれた。また「愛着」ならびに「誇り」と、「ボランティア意向」ならびに「就労意向」の間にはそれぞれ相関がみられるものの、とくに「愛着」と「就労意向」の間、ならびに「誇り」と「ボランティア意向」の間により強い相関が見られた。

この結果から、**地元に対する「愛着」が強いほど、「就労意向」が高まると言え、地元に対する「誇り」が高いほど、「ボランティア意向」が高まることが導かれる。**

(群馬県出身者の傾向)

群馬県出身者の傾向について分析しよう。群馬県出身者の回答についても、「ボランティア意向」ならびに「就労意向」の「わからない・どちらともいえない」という回答を除いたところ、「愛着」ならびに「誇り」、「ボランティア意向」ならびに「就労意向」の各項目間に相関が見られた。

群馬県出身者全体では、「愛着」も「誇り」のいずれも、「ボランティア意向」よりも「就労意向」により強い相関が見られた。つまり、**群馬県出身者の地元に対する「愛着」と「誇り」は、「就労意向」として重要な要因であるということになる。**

(群馬出身者の男女別特性)

群馬県出身の男子学生に限れば、全国の傾向と同様、「愛着」と「就労意向」に比較的強い相関が見られた。また「誇り」と「ボランティア意向」にやや高い相関が見られるものの、「就労意向」にも同程度の相関が働くことがわかった。言い換えれば、**地元に対する「愛着」が強まれば、「就労意向」が高まり、地元に対する「誇り」が高まれば、「ボランティア意向」と**

(群馬県出身者：愛着度の高い理由)

表8の頻出語リストからみると、群馬出身者は「生まれ」というワードが、群馬外出身者と比べると頻出していることがわかる。以下では「生まれ」という回答を抜粋しているが、生まれ育った場所だから自然と愛着がわくのだ、という理由が多くみられる。

(生まれ)

- ・生まれてずっと住んでいるから
- ・生まれてきてお世話になっているから
- ・生まれた時からずっと同じ場所に住んでいるため
- ・生まれ育ったところであり、良い思い出が多いため
- ・やはり生まれ育った土地なので
- ・自分が生まれ育った場所だから
- ・自分が生まれ育った地域でもあり、好きだから
- ・住みやすいし、生まれ育った場所だから。

また「災害」というワードも多く使われている。図5の共起ネットワークからもわかるように、「災害」は「自然」と「少ない」という言葉と多く使われている。

以下、「災害」という回答を抜粋しているが、群馬出身者にとっては、「自然災害が少ない」という安心感も、地元への愛着に結びついていることが見える。

(災害)

- ・災害がない
- ・災害も少なく安全なところ
- ・災害がなく都市部へのアクセスが良いため
- ・自然災害が少なく、物価も安いし暮らしやすい
- ・自然災害が少ないし、車さえあれば都心に近い
- ・自然災害が少なく、新幹線や高速道路なども通っており、県外に出るときの交通が便利
- ・自然豊かで自然災害も少なく住みやすいと感じている
- ・自然豊かで静かで災害が少ない
- ・山が噴火しない限り災害の被害がほとんどない

また図5で示された通り、「都会」と「田舎」、「過ぎ(る)」というワードは、「田舎過ぎず、都会過ぎず(良い)」というように用いられており、そのことも地元への愛着へとつながっているようだ。以下、「都会」、「田舎」、「過ぎ(る)」という回答を抜粋したものである。

(田舎)

- ・都会と田舎の間位の感じで過ごしやすい
- ・田舎だけど住みやすい所なので、意外と愛着が持てる
- ・田舎過ぎでも都会でもないバランスの取れた町だから
- ・田舎過ぎず都会過ぎない、田舎よりの地域である。
- ・田舎過ぎず都会すぎなく過ごしやすい。
- ・栄え過ぎず田舎過ぎず過ごしやすい
- ・あまり田舎過ぎず、都会過ぎないところが好きだから

(群馬県出身者以外：愛着度の高い理由)

群馬県出身者以外の学生の地元への愛着度の高い理由について、表8をみると、「人」、「町」、「豊か」といったワードが、群馬県出身者と比べると多く使われている。以下、「人」、「豊か」という回答を抜粋した。

(人)

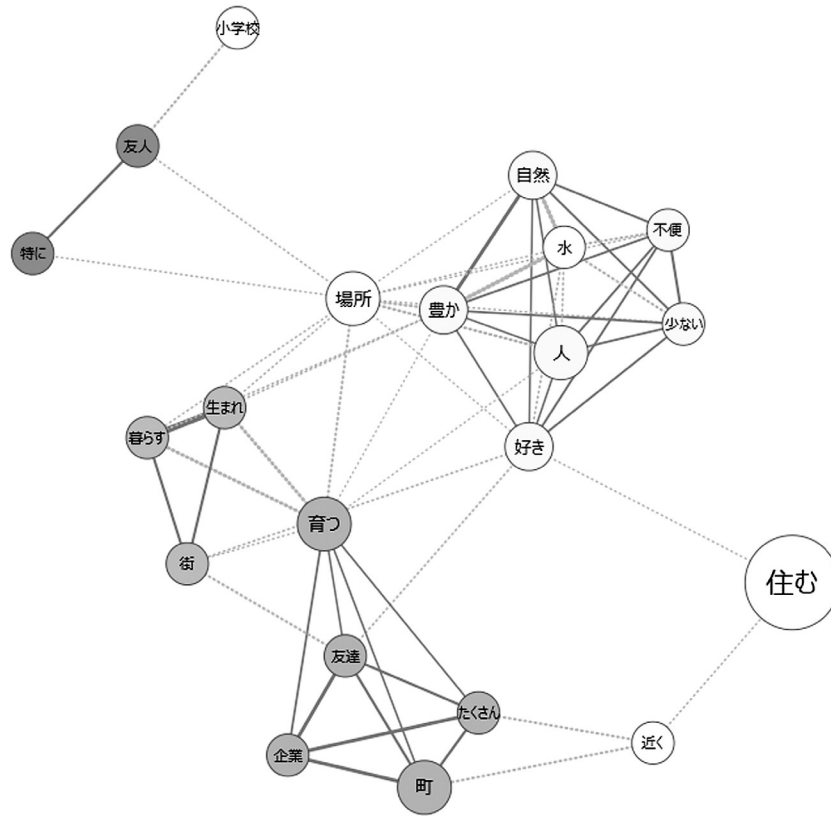
- ・自然が多く人がとても優しい
- ・いろいろな年代の人と交流できるから
- ・ものは少ないけど人と人との結びつきが強い
- ・人口が少なく高齢者が多いがとても優しい人が多くて、秋には祭りもある
- ・地元のものをアピールしようとがんばっている人が多い
- ・生まれてからずっと育ってきた場所だし、あたたかい人ばかりだから

(豊か)

- ・緑が豊かで暮らしやすい
- ・山も海もあって自然豊か。島もいっぱいあって観光地。
- ・山も海もあって自然豊かで、食べ物も一番おいしいと思っている
- ・水がおいしい、自然豊か、住みやすい
- ・人がすごく優しく、自然豊かで水もおいしく、市の行事が充実している

以下の図6は、群馬県外出身学生の地元への「愛着」を感じる理由を示した「共起ネットワーク」図である。「自然」というワードは、群馬県出身者のものと違い、「豊か」、「水」、「不便」などとつながっており、自然そのものへの愛着を指していることがわかる。

図6 愛着を感じる理由の共起ネットワーク（群馬県外出身学生）



（誇りに関する頻出語）

以下の表9は、「誇り」の度数が高い学生の回答から、地元への「誇り」を感じる理由の中で述べている頻出ワードを抽出したものである。表は「全国」、「群馬県出身者」、「県外出身者」に分けて、頻出語をリスト化している。

全国 (N=102)		群馬県出身 (N=64)		群馬県外 (N=38)	
多い	24	多い	14	多い	10
自然	14	有名	7	自然	8
有名		温泉	6	有名	7
人	10	観光		たくさん	6
たくさん	9	自然		水	5
豊か		人		豊か	
良い		良い		思う	4
温泉	8	住む	5	人	
観光	7	少ない	4	きれい	3
誇り	6	世界		海	
思う		遺産		城	
住む		豊か		誇り	
世界				地元	
歴史				歴史	

表9 誇りを感じる理由における頻出語

（群馬県出身者：誇りが高い理由）

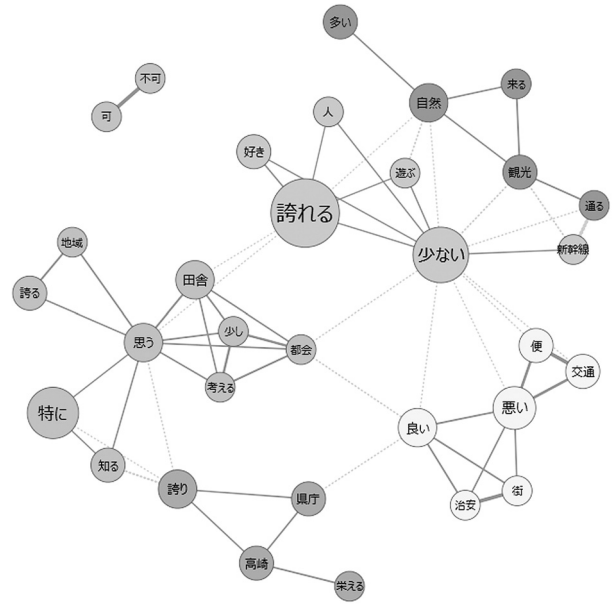
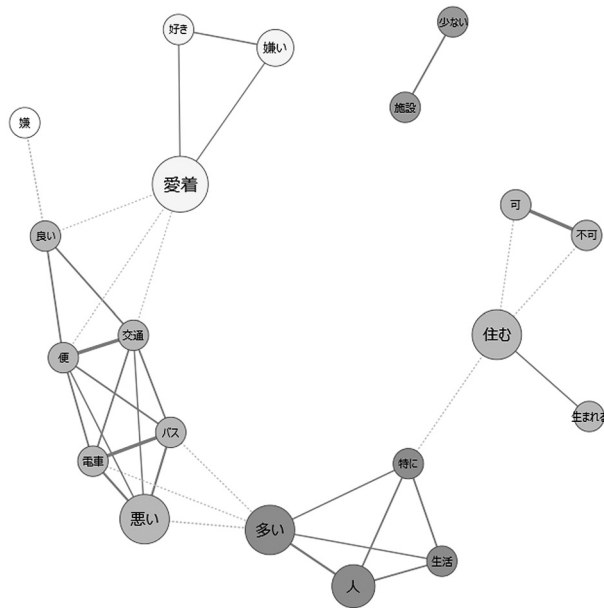
「温泉」、「世界」、「遺産」という用語は、群馬県出身者のみで使用されており、群馬県出身者の回答の特徴となっている。以下、「温泉」という回答を抜粋した。

（温泉）

- 温泉が良い
- 温泉が多く名湯もある
- 有名な温泉や歴史的文化が多くあるため誇りを持っている
- 日本でも有名な伊香保温泉があり、多くの観光客が訪れる
- 特別有名なものはないが、温泉マークの発祥地や少しだが誇りと思えるものがある
- 交通の便が悪いけど、伊香保温泉があるのでみんなに自慢できる

図8 愛着を感じない理由の共起ネットワーク（群馬県出身者）（左図）

図9 誇りを感じない理由の共起ネットワーク（群馬県出身者）（右図）



（悪い）

- ・素行の悪いものが多い
- ・良いところだが悪いところもある
- ・車や自転車のマナーが悪いことや道路の状態が悪いところが多い
- ・都市化が進んでいなく、電車やバスなどの交通の便が悪すぎる

（誇りが低い理由）

地元への誇りが低い、または持てない理由では、「少ない」というワードが多く挙げられている。「誇れる」「もの」や「ところ」が少ないというように、「誇れる」というワードと結びつき使用されたものだ。以下、「少ない」という回答を抜粋した。

（少ない）

- ・名産が少ない
- ・観光名所が少ない
- ・誇れるものが少ないと感じるため
- ・誇れるところが少ない
- ・田舎なので主張すべきところが少ない

愛着度と同様に、誇りを損なう理由では、「悪い」というワードが挙げられており、愛着と同様に「交通」関係のワードとの結びつきが強い。以下、「悪い」という回答を抜粋した。

（悪い）

- ・交通の便が悪い
- ・交通の便が悪い
- ・良いところ、悪いところがある
- ・名産が少なく交通の便が悪い
- ・治安が悪いためもっと治安のよい街になってほしい

4-2-8. 計量テキスト分析による結論

以上、群馬県出身者を中心に、どのような要素が地元に対する「愛着」や「誇り」を生み出しているのか、または損ねているのか、計量テキスト分析により導き出したが、そこから考えられることを以下まとめた。

（愛着と誇り）

大学生が地元で「愛着」を持つ理由を見るとまず、「風景」や「人との関係」に関する用語が多く見られた。生まれきて地域で生活をする中で自然と目に入るものや、経験をすることが地元への愛着を生み出し、

育むということが導かれる。

一方で、大学生が地元への「誇り」を持つ理由では、自然環境の良さのほか、地域の文化や産業に関するものが多く見られた。また「有名」、「多い」といった質、量をあらわすワードも多く使われていた。

本調査における計量テキスト分析の結果からは、「愛着」を生み出すものは個人にとって絶対的なものであり、「誇り」を生み出すものは比較を含む相対的なものであることが導きだされた。

では、群馬県出身者の地元への「愛着」と「誇り」について考えてみたい。群馬県出身者が地元へ愛着を持つ理由として、「自然」環境の良さ、豊かさに関する言及も多い一方で、「自然災害が少ない」ことで愛着を抱く者が多いことが分かった。安心して暮らせる地域であることが、地元への愛着の源泉になるという仮説を導き出すことができる。また「田舎過ぎず、都会過ぎず」という理由も、県外出身者にはあまり見られないものであり、自然と町のにぎわいの絶妙なバランスや、心地よさが地元への愛着の源泉になっているとも言える。

さらには「生まれた場所だから」という理由も県外出身者に比べ多く見られた。これは、「生まれた場所だから」愛着をもつのはあたりまえ、ということかもしれない。群馬県出身者は地元への誇りが低いゆえに、他者が介在しない感情を拠り所にし、地元を肯定していると仮定することもできる。

群馬県出身者の地元への「誇り」を生むものは、県内に豊富な「温泉」や、近年、注目が高まっている「世界遺産」の位置づけが高いようだ。反面、交通の便の悪さが、愛着と誇りを低下させているという結果が出ている。

5. 結論

本調査を通じて、地元への「愛着」と「誇り」は、地元での「ボランティア意向」と「就労意向」に相関があることが確認できた。とくに、若者の地元への「愛着」は「就労意向」を高め、地元への「誇り」は「ボランティア意向」を促進することがわかった。

先述の通り、「愛着」は自己完結的な感情であり、「誇り」は他者の肯定を要する感情である。持続可能な地域づくりを目指すのであれば、まずは若者の愛着を醸成するしかけが必要であろう。つまり、地元への

肯定意識である「愛着」があって初めて、他者への「自負心」である「誇り」を生むからだ。愛着は、地域やコミュニティにおいて地道に生まれなければならない一方で、誇りは「シティプロモーション⁹」などの手法を用いて、さまざまな主体が戦略的にしかけることが可能である。

たとえば東京都足立区では、ネガティブに語られる事の多い区のイメージを払しょくするため、2014年にシティプロモーション課を設置した。同課では地域資源の掘り起こしのほか、さまざまな施策を内外に戦略的に発信し、「足立区を自慢できる、誇れる街へと進化させる」ことを目指しており、その成果が出つつある。

それでは、若者の地元に対する「愛着」を深め、さらに「誇り」へとつなげるためには、どのような手法が効果的なのか。地域での取り組みや地元住民自らができることとして、「地元学」が参考になると考える。

地元学は、熊本県水俣市においてはじまった市民の運動である。やはりネガティブに語られてきた水俣を何とかしようと、行政と市民が一体となって地元の良さを再発見し、地元と住民自らへの信頼を取り戻すべく始められた。

提唱者である吉本哲郎によれば、地元学とは「ないものねだりをやめてあるものを探し、地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、あるものを新しく組み合わせ、ものづくり、生活づくり、地域づくりに役立てていく。それぞれの風土と暮らしの成り立ちの物語という個性を確認し、大地と人と自分に対する信頼を取り戻し、自分たちでやる力を身につけていく」という手法と考えである（吉本2008）。

群馬県出身者の回答からは、地元には「なにもない」という意識が強く感じられた。群馬の若者にはぜひ「地元学」の手法と考え方を参考にしてもらい、「あるものを探し、地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、あるものを新しく組み合わせる」、魅力ある地元をつくってもらいたい。そして他者からの目、いわゆる「ヨソモノ」の視点を利用することによって、群馬の良さを再発見し、地元への「誇り」へとつなげてもらえることを期待したい。

(参考文献)

愛着あだちの会「愛着あだちの会2018調査票」2018年。

有光興記「誇りの経験的定義」『日本心理学会大会発表論文集』71巻、日本心理学会、2007年。

ブランド総合研究所「週間ダイヤモンド(特集 ニッポンまるごとご当地ランキング2016/03/26号)」、2016年、pp.54-67。

舟橋左斗子『足立区のコト。』2018年、彩流社。

彩の国さいたま人づくり広域連合(2018)「シビックプライド ～いま、地域に必要なこと～」『彩の国さいたま人づくり広域連合政策情報誌 Think-ing』平成30年3月第19号、p.1。

総務省統計局「統計 Today No9」(<http://www.stat.go.jp/info/today/009.html>) (2018年9月1日アクセス)

鈴木春菜・藤井聡「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」『土木学会論文集 D3(土木計画学)』25、2008年、公益社団法人 土木学会、pp.357-362。

伊藤香織「シビックプライドとコミュニケーションポイント」『彩の国さいたま人づくり広域連合政策情報誌 Think-ing』、2018年、平成30年3月第19号、p.2-8。

河井孝仁『シティプロモーションー地域の魅力を創るしごと』2009年、東京法令出版。

文部科学省「高等教育に関する基礎データ(都道府県別)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryo/_ics_files/afildfile/2017/08/01/1388715_05.pdf) (2018年9月1日アクセス)

吉本哲郎『地元学をはじめよう』2008年、岩波書店。

組みを進めている。

6 県外に拠点がある明治学院大学については、群馬出身者のUターン就職者数をデータに計上している。

7 このような状況の中、群馬県では2017年7月に「Gターン就職促進プロジェクトチーム」を設置し、県外へ進学した者のUターン就職率の向上を目指している。プロジェクトチーム座長の安斎徹 目白大学教授によれば、「県外へ進学した者のUターン就職率を50%へ引き上げる目標だが、現状では33%」という水準にあるという。

(安斎徹座長 目白大、2018年7月20日実施の議事録より)

8 「大学生の地域間移動に関するレポート 2017、2018」(リクルート就職みらい研究所)によれば、群馬県出身の大学生(就職活動開始前)で、「地元で働きたい」学生の割合は、2017年の調査では86.7% (「働きたい」60% 「どちらかという働きたい」26.7%)、2018年の調査では75% (「働きたい」58.3% 「どちらかという働きたい」16.7%) という結果が出ている。ただしサンプル数が、2017年はN=15、2018年はN=12のため、参考程度である。

9 河井孝仁によればシティプロモーションとは「地域を持続的に発展させるために、地域の魅力を地域内外に効果的に訴求し、それにより、人材・物財・資金・情報などの資源を地域内部で活用可能としていくこと」である。

- 1 総務省統計局「統計 Today No 9」によれば、2005年に戦後初めての減少となった後、2006年に2,000人、2007年に1,000人と、2年連続してわずかに人口が増加したが、2008年にピークを迎えたのち、人口減少へと転じた。
- 2 同調査は、平成15年2月から6月までに、5か国における18歳～24歳までの青年を対象に実施された。各国ともに1000サンプル回収を原則とし、日本では内閣府により実施され、地域や都市規模を考慮し全国より1042の回答を得たものである。
- 3 「郷土愛ランキング」において、「愛着度」とは「地域と回答者自身の関係性、思い入れ」であり、「自慢度」とは「地域と外との関係性・誇り、外部に積極的に情報発信する性向など」と定義されている。
- 4 「とても愛着がある・自慢できる」と答えた%に、「やや愛着がある・自慢できる」と答えた%の半値を合計しポイントとしている。
- 5 平成27年度より文部科学省では、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的とした「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+事業)」を実施している。この事業では、地方の大学に対し、地方公共団体や地元企業等と協働し、学生にとって魅力のある就職先を創出するとともに、学生の地元定着を促進するための計画を策定することを求めている。本学はCOC+事業の参加校(申請校:前橋国際大学)として、今年度より事業に取り組んでいる。その中心となるネットワークが「C3PG (Consortium for Center of Community Plus in Gunma)」である。C3PGでは、地域を担う人材を育成する大学、地域活性化政策を担う自治体、人材を受け入れる地元企業、地域活性化を目的に活動する民間団体などが協働し、地域の雇用創出、学卒者の地元定着促進、人材の育成の取り

